Jan.2014 No.359

福井市自然史博物館

博物館だより

FUKUI CITY MUSEUM OF NATURAL HISTORY NEWSLETTER

アカウミガメ（2013.1.11　福井市鷹巣海岸）

福井の自然史情報

ウミガメの漂着

ウミガメ、それは大海原の旅人。彼らの壮大な旅路のすべてを私たちはいまだに解き明かすことができていません。
2012 年から 2013 年にかけて、継続的なウミガメの漂着が北陸沿岸で確認されました。これは一体何を意味するのか、今、日本のウミガメ研究者たちが日本海のウミガメに注目しています。

裏面にウミガメについての詳しい解説があります。

二〇一四年の干支　午

2014年の干支であるウマ。乗用、運搬、農耕の手段として、古来人々の暮らしと深く関わってきたウマとはどのような生き物なのか。その生態や特徴について、紹介したいと思います。

「干支展・午」

博物館では**2014年1月5日(日)から2月2日(日)まで**、今年の干支である午にちなんだ標本の展示を玄関ホールにておこないます。ぜひお越しください。

動物種としての“ウマ”

根室の馬

ウマというと一般にサラブレッドやアラブ馬などの品種が知られていますが、動物の種としてはすべてイエウマ *Equus caballus* という単一の種になります。野生のウマは300万年ほど前に北米大陸で出現したのち、ベーリング海が地続きとなった氷河期にユーラシア大陸まで広がりましたが、気候や植生の変化が原因で1万年前頃にほとんどが絶滅してしまいました。一部生き残ったものが、西アジアを中心に家畜化されて現在に至っています。現在野生で生息しているウマは、モンゴルに生息するモウコノウマを除けば、家畜化されていた品種が再び野生化したものです。

ウマの進化

ロバ

最古のウマの仲間とされているのは、およそ5000万年前に現れたヒラコテリウムです。前足に4本、後ろ足に3本の指を持ち、体長60㎝ほどの、森林に棲む動物でした。その後、ウマの仲間は草原へと進出。メソヒップス、メリキップス、プリオヒップスと進化するにつれて体は大型化し、指は1本の蹄となって走行能力を高め、草原の硬い草を食べるための歯を発達させました。

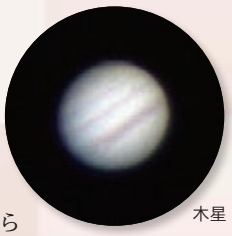
シマウマやロバは、ウマと同じ *Equus* 属に含まれる種で、およそ400万年前以降に共通祖先から分岐したと考えられています。

日本の在来馬

元々日本列島にウマは生息していませんでしたが、古墳時代以降に大陸から家畜として導入されて日本中に広まりました。在来馬はいずれも体高の低い小型の品種で、現在は北海道和種馬（道産子）や木曽馬など8品種が残っています。

明治以降、品種改良のために外国品種との交配が積極的に行われ、純粋な在来馬の数は少なくなりました。現在、希少となった在来馬の保護が行われる一方で、在来馬の血統に近いものを交配させることによって在来馬を復元しようとする試みもなされています。

「午」の漢字



木星

十二支とは元々、約12年の公転周期を持つ木星の位置をもとに方角を十二等分したものです。その7番目には、草木の成長期が終わり衰え始める様を表す“午”の字が用いられました。のちに身近な動物や家畜が十二支に当てはめられましたが、午にウマが選ばれた理由については定かではありません。

十二支は年月や方角のほか、時刻を表現する際にも用いられました。深夜0時頃を十二支の最初である子の刻とし、午の刻と言えば昼の12時とその前後約1時間を指します。昼の12時を正午と呼ぶのはこのためです。

※干支とは、本来は十干と十二支でできる60の組み合わせをいい、暦、時刻、方位を表すのに使いました。ちなみに2014年は甲午（きのえうま）です。

ウマの仲間たち

ウマは哺乳類の中で奇蹄目（ウマ目）というグループに分類されています。奇蹄目というのはひづめ（指の先端が硬くなったもの）が奇数（ただしバクの前脚は4本）ある動物たちで、世界中に現在約16種が生息しています。現生の奇蹄目はウマ科、サイ科、バク科の3科に分けられます。ウマ科は野生ではアジア大陸とアフリカ大陸に分布します。分類のしかたによって多少変わってきますが、約7種が知られています。サイ科はアフリカ大陸、インド・ネパール、東南アジアに5種が生息しています。バク科は南北アメリカ大陸と東南アジアの熱帯林に4種が生息しています。これまで奇蹄目に近い動物はひづめを持つ偶蹄目（ウシ、シカ、イノシシなど）であると考えられていましたが、最近の遺伝子配列を調べた研究から翼手目（コウモリの仲間）や食肉目（イヌやネコの仲間）などの方が近縁であるという説が有力になってきています。奇蹄目には、ウマやロバのように家畜化されたものがいる一方で、生息環境の改変などにより絶滅が心配されている種が多くいます。

馬の名前のつく植物

アセビの花
（2008.4.17 足羽山、植栽）

アセビ（馬酔木）

本州～九州のやや乾燥した山地に生える常緑の低木です。観賞用に植栽もされています。県内では主に嶺南地方に自生しています。葉は楕円形で表面に光沢があり、枝先に集まってつきます。4～5月、枝先から白色でつぼ形の花が多数集まった円錐花序※を垂らします。有毒植物であり、葉や樹皮、花などに毒性があります。「馬酔木」の名は、馬が葉を食べると酔ったようにふらつくことから付けられました。シカなどの草食哺乳類の多くはアセビを避け、食べ残します。このため、アセビが不自然に多い地域では草食哺乳類による草本の食害が起きていることが疑われます。県内の嶺南地方でもアセビ以外の下草がほとんどない地域があり、シカによる食害が深刻な問題となっています。

※円錐花序（えんすいかじょ）…花のついた枝全体が円錐形になるもの

馬の名前のつく虫

ヤスデ（馬陸）

頭部とそれに続く多数の胴節から成り，はじめの3つの胴節からは各節1対、それ以降の胴節からは2対ずつの歩脚がでています。ヤスデの和名は「八十手（やそで）」、すなわち脚が非常に多いことにちなんでいます。1つの体節から2対の歩脚が生えていることから倍脚類の名で呼ばれることもあります。ヤスデは中国では「馬陸」の名で呼ばれますが、その由来の詳細は不明です。

森林に生息する土壌動物で、落ち葉や倒木などを食べ、森の分解者として生態系の中で重要な役割を担っています。日本では300種ほどが知られており、中には父親が卵を保護する習性をもつもの、発光するもの、何年かの周期で大発生をするものなど面白い生態を持ったものもいます。

馬の名前のつく貝

マテガイ（馬刀貝）

特徴的な細長い形の殻を持つ二枚貝で、内湾性の潮間帯に生息しています。殻長は10㎝ほどですが、最大で1m近く潜砂します。マテガイを漢字で書くと「馬刀貝」となり、一説では中国の馬刀（マータオ）に形が似ていることから名前がつけられたとされています。地方によっては、カミソリガイ（剃刀貝）やタケガイ（竹貝）と呼ばれることもあります。

マテガイは干潮時に深く潜り、潮が満ちてくると穴から出てくる習性があります。この習性を利用し、巣穴に塩を入れることで潮が満ちたと勘違いさせ、巣穴から飛び出したマテガイを捕まえることができます。殻の形は独特ですが、普通に食することもできる貝です。

博物館だより
No.359号 発行日 2014年1月7日

自然史リレーエッセイ 32

石川県南部から福井県沿岸域におけるウミガメ類大量漂着について

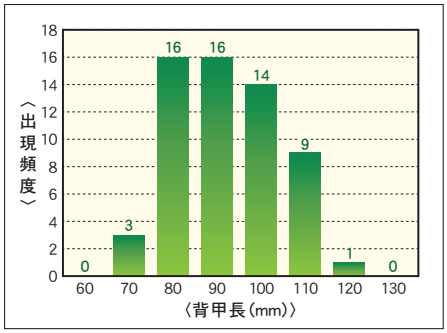
梨木　之正（福井市自然史博物館 学芸員／福井漂着ウミガメの会）

ウミガメの漂着が多かった地域

2012年11月から2013年2月（以下2012年度冬季とする）にかけて、石川県南部から福井県沿岸にかけてウミガメ類が74個体漂着した（死亡漂着のみ）。そのうち、大半は10cmに満たない子ガメであった。これは長いウミガメ研究の中でも特異な出来事であり、現在、ウミガメ研究者の中でも日本海におけるウミガメ類の動向に注目が集まっている。

日本沿岸域で見ることのできるウミガメは、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、オサガメ、ヒメウミガメ、クロウミガメの6種類である。アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイは日本国内に産卵地があり、なかでもアカウミガメは比較的高緯度地域で産卵を行うために、本州沿岸部でもまとまった産卵地があり、福井県でもアカウミガメの上陸、産卵の記録がある。緯度が下がるに従い、アオウミガメの産卵地が多くなっていき、薩南諸島を境に徐々にアオウミガメの産卵地が増えていく。タイマイは国内の産卵場が少なく、先島諸島以南に少数存在する程度である。

〈2012年度冬季、福井県に漂着したアカウミガメの体サイズ別出現頻度〉



〈石川県南部―福井県沿岸　年度別ウミガメ類漂着数〉

	アカウミガメ	アオウミガメ	タイマイ	ヒメウミガメ
2009年度冬期	4	0	0	0
2010年度冬期	0	0	0	0
2011年度冬期	2	0	1	0
2012年度冬期	60	8	5	1

生まれたばかりの子ガメは体が小さく、中ー大型の魚類や海鳥などに襲われる危険が大きいために速やかに沿岸部を抜け、天敵の少ない外洋へ移動する。外洋では流れ藻を始めとした漂流物に寄り添って捕食者の目を逃れて生活している。この頃のカメは外洋に漂うプランクトンや海藻を主食としているようである。その後、甲長が40～70cm程度になると生活の場を沿岸域に移しているようだが、詳しいことはまだ解明されていない。

2012年度冬季に石川県南部から福井県沿岸域にかけて大量漂着したウミガメ類は、大半が外洋で生活をおくっているステージの子ガメであった。また2012年度以前にも同時期に少数のウミガメ類が漂着しているが、いずれも背甲長が10cm程度の子ガメであった。このようなサイズのウミガメが漂着することは大変珍しいことであり、全国的に見た漂着ウミガメの平均背甲長は40～70cm程度で、亜成体ー成体がその大半を占めている。

このことより、石川県南部から福井県沿岸域に漂着するウミガメ類は、本来外洋で生活している子ガメたちが何らかの原因で沿岸域に流され、寒さによって死んでしまい、打ち上がったものと考えられる。

これまで日本海というフィールドはウミガメ研究者にとってあまり重要ではないと考えられてきた。それは上陸、産卵場所が無いこと、漂着、混獲によるデータ量も太平洋側に比べてはるかに少なかったためである。しかし、今回のウミガメ類の大量漂着、そして漂着した個体の体サイズが他の地域ではまず打ちあがることがないサイズであるという特異性によって、研究者の間で日本海は重要な地域であるとの認識が広がりつつある。

ウミガメ類は海中で生活し、外洋に出て回遊するという、我々が容易に観察ができない生物であり、その生態の解明は困難を極めている。しかし今回の大量漂着をきっかけに、これまで知られていなかったウミガメ類の生態がまた一つ明らかになるのではないかと私は期待している。

《あとがき》

今号では、漂着ウミガメとウマについて取り上げました。ウミガメそのものは決して身近な動物ではありませんが、ウミガメの漂着は海流など海洋環境と関連した話であり、他の分野を専門とする者としても気になる研究です。

2014年の干支は「ウマ」。古くから人々の暮らしに欠かせない存在であり、多くの動植物がウマにちなんだ名前をつけられているほか、「馬」の字が入った地名や名字も少なくありません。このように、ウマという動物一つ取っても様々な分野のものが相互に絡み合っていることに、面白さを感じます。（有馬）

《交通案内》

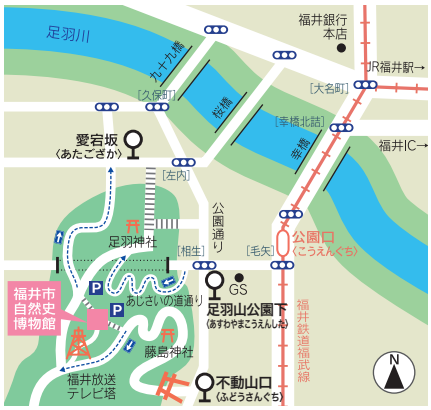
【電 車】
●福井鉄道福武線 公園口駅 徒歩20分

【バ ス】
●京福バス：清水グリーンライン（74系統）足羽山公園下バス停（あじさいの道登る）、不動山口バス停（藤島神社登る）各徒歩10分
●コミュニティバスすまいる：西ルート（足羽・照手方面）愛宕坂バス停 徒歩10分

【徒 歩】JR福井駅から徒歩30分

《ご利用案内》

開館時間●午前9時～午後5時15分（入館は午後4時45分まで）
休 館 日●月曜日（祝休日は開館）、国民の祝休日の翌日、年末年始
入 館 料●高校生以上100円（20名以上の団体は半額）
中学生以下、70歳以上、
障害者および付添の方は無料



編集・発行　福井市自然史博物館
〒918-8006　福井県福井市足羽上町147　TEL:0776-35-2844　FAX:0776-34-4460
E-mail:sizen@city.fukui.lg.jp　URL:http://www.nature.museum.city.fukui.fukui.jp

PRINTED WITH SOY INK